

日高先賢伝

日
高
先
賢
伝

清水
長
一
郎

目次

一、鈴木梅仙	1
一、湯川玄洋	16
一、津村為徳	25
一、小竹岩楠	30

鈴木梅仙

「紀州新聞」昭和37年4月18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29日

鈴木梅仙は南部の人である。八十余年の長い生涯を、日本墨の改良にさゝげ、あらゆる苦難のあげく遂に墨の本場、中国産のものをしのぐ名墨・梅仙墨を製作して、当時の文人墨客の間に名声をうたわれた。今ならさしずめ人間国宝に指定されたであろう人である。

いつごろのことであつたか、明治の功臣勝海舟邸へ一人の壮漢があらわれ、海舟に面会を求めめて断わられた。男は懷中から、

白笑此身為墨痴

半生日月老天涯

坡仙去後無相識

海内知音定是誰

と、自作の詩を書きつけた紙片をとり出し玄関においたまゝ黙然と去つた。この男が鈴木梅仙であつた。海舟と梅仙はこれが機縁となつて結ばれた。海舟の紹介で梅仙は山岡鉄舟・高橋泥舟と親交を重ね、さらに橋本雅奉・川合玉堂・富岡鉄斎等・日本画壇の巨匠たちの愛顧をうけるようになった。大正七年十二月梅仙が長逝したときは、日本中の書家や画家は、これで本当の墨は日本から絶えたと思つたという。

鈴木梅仙は天保七年一月十一日（一八三六）西牟婁郡西ノ谷村、いまの田辺市上秋津字西ノ谷・鈴不喜市と織江の二男に生まれた。貴志康親著・紀州芸術家小伝に新宮の人とあるのは誤りである。家は普通の農家であつたというが、代々苗字帯刀の家柄であつたと伝えるから、やはり只の小作百姓ではなかつたらしい。梅仙・童名は省八・後に修三と改め・さらに梅仙と改名し、晩年は二男・三郎に梅仙を襲名させ、梅翁と名のつた。

梅仙は墨の製造に独目の妙技をふるつたばかりではない。漢学に長じ書をよくし、後年「墨苑清賞」・「ほう古園墨法概言」の著述を刊行し、明治三十三年五月雑誌「太陽」と「美術協会報告書」に、講演筆録「墨のはなし」を寄せている。「墨のはなし」は墨に関する縦横談で興味が深く、自伝的な要素も多いから「墨のはなし」の記事を中心に彼の生涯をたどつてみる。

梅仙は子供のころは病弱で、その時分の普通教育である寺子屋へも満足に行けず、十四才になつて、やつと二十町ばかりはなれた田辺へ通うて、読み書きを習つた。さて文字に親しみだすと深い意味は分らぬが学問が面白かつた。何とかして此の道の奥底を究めたいという気持が湧いてきた。それで夜は家人の目をさけ、行灯に自分の着物をかけて灯火のもれぬように気を配り、おそくまで読書をつづけた。はじめは百姓として家をつ

がせる心算であつた父親も、この熱心な勉強ぶりに心を動かし、今度は正式に田辺の漢学者、中田某の門に入れた。

それから十六の歳まで足掛け三年の間、雨にも風にも半日の休みも惜しくて、昼の行厨（筆者注―弁当のこと）も持たずに通いつめました。

勿論親は私の病弱なのを氣遣うて、余り勉強するなと常々戒められましたが、私は衣服などとは何様に汚くても宜いから、其代りに書籍を購て下されと強いて嘆願して三年の間、朝夕二食で、夜分は必ず午前二時から三時ごろまで読書、習字などを致しました。けれども生来の遅鈍で、なか／＼埒が明きません。然し負惜みの強い方でありまして、最初四書の素読から始めて十六才まで、五経、文選、蒙求、十八史畧、史記、左伝、国語等を卒て、回書五経の講義まで殆んど昼夜兼行の姿で進みました。

梅仙著「墨りはなし」の中の一節だが、この中で梅仙は

さて、自分は元来非常に物に凝る性でありました。

と自分の性格を語り続けて、

然し負け惜みの強い方で……

とも記しているが、そのひたむきな勇猛心は、とうてい物に凝り性だとか、負けぬ気などと形容すべき、生易しいものではない。

こうして梅仙の学問は日毎に進んだ。しかし人の体力には自ら限界がある。夜を徹し食を節しての無理な勉強は、もとよりあまり丈夫でなかつた梅仙の体を、損なわずにはおかなかつた。「墨のはなし」は、この間の模様を、

然る処其内に段々と逆上して来て耳が熱くなつて夜分睡られない。

と述べている。神経衰弱であつたのかも知れぬ。普通の人なら此処で医者にかゝるか、休養をとるところだが、梅仙は中々屈しない。

よつて手拭を冷水に浸して夫を左右の耳に当て、辛うじて眠りにつくという様な次第、暫くすると又齒が痛み出して殆んど耐え難い。夫をじつと辛抱して親どもへは蒙も申しません。申せば直ちに読書を廃めろと言うわれるのが何より恐ろしい。そうする内にととう左の耳が聾れてしまったので、露見に及んで大いに叱られたことがございました。

然るに十六才の秋に至つて今度は不図吐血を始めて、これには自分も大いに驚きまして、斯様に弱い

体では所詮学問はできぬかと嘆息致しました。よって本箱、筆硯の類は皆親にとりあげられ、これでは生き甲斐もないと考えながら、それから四、五年の間種々の療養を致しましたが中々治りません。

多分胸部疾患ではなかったかと思われる病状である。今のように特効薬のなかった時代である。病気はいっこうにはかばかしくない。学問を離れては何の希望もない、暗い数年間がつづいた。ある日人から、

お前の病気は医療で治る見込はない。一ツ灸を試みては如何だ。何でも口から艾の臭いがでる位まですれば、必ず治る。

とすゝめられた。そこで梅仙は例の負けぬ氣をなして、

よし！この体軀を焼函殺すか、早く治して志を遂げるか二ツに一ツだ。やってみようというので、夫から三年ばかりの聞、毎月三日ずつ多分の灸をすえました。夏の日長の頃には一日に大抵三万五十圭もすえました。

と灸療法をつづけたところ、これがきいたのかさしもの難病も嘘のように治った。

体が元氣になると、もうじつとしておれない。再びはげしい勉強がはじまった。今度は田辺の漢学者・石田酔古の門に入って詩を学んだ。はじめると徹底しないではおられぬ性格である。詩会のある晩は、雨でも風でも頓着せずに通った。石田酔古もこの熱心な青年梅仙には特に目をかけた。詩会が終って帰り道で夜の明けるのは、いつものことであつた。

すると今度は脳労という病が出まして、頭がしんくんと痛んで耐らない。時々眼が眩むようになった。こうなると流石の梅仙も

自分もつくづく嘆息して、こんな工合では到底学問はできぬ。

と学問研究を断念せざるを得なかつた。それなら、

何かこの身にふさわじい仕事で、学問の補助にもなり、しかも国益の片端にもなる様な業はなからうかと、いろいろ考えてみた。

そのころ梅仙の長兄は、土地で松煙の商いをしていた。療養中の梅仙は時々長兄を訪ね氣分のむいた時は兄の手伝をした。そのうちにフト墨の製造をはじめてみようかと思いついた。松煙は製墨の原料だから無理のない思いつきであつた。

その上、考えてみると紀州の地は、昔から藤代墨の名で聞こえた、わが国では一番古い墨の産地でもあつた。そうした由緒もいつか世間から忘れられて、それよりもずっと後にはじまった奈良が、墨の本場のように思わ

れているのも残念なことであつた。

そうだ、墨だ！立派な墨をつくれば学問は断念しても、間接にわが国の文化につくすことができる。こう思いたつと梅仙の製墨に対する情熱は、異常なまでに燃え上つた。こうしていよいよ墨の研究と製造にとりかゝつたのは、梅仙が三十一歳の時というから、年表に照らすと、慶応三年（一八六七）にあたり、世はまさに内憂外患、物情騒然たる中に、新生日本がようやく誕生せんとするころであつた。

梅仙の最初の製墨工場は今の田辺第一小学校の附近——田辺市上屋敷町にあり、墨工は三人という小さなものであつた。

然る所又例の凝り性で非常に墨の方が面白くなつて来て、人々から官途を勧めらわたことも屢々でありましたが、そんな方へは更に耳を傾けず、一切他の功名富貴の念をなげすて、何卒して蘇東波や薰山谷に賞せられた、唐の李廷圭の墨のような美墨を造り出して、今の唐墨（即清墨）の輸入を防ぎたいと思つて色々と製して試みましたが、どうも粘り過るとか、色が思わしくないとか、とにかく害画に適する程の良品が出来ないので、非常に苦心致しました。

梅仙自身が「墨のはなし」で、このように語っているように、商売気をはなれての苦心であつた。

しかし、思うような良墨はなかなかできなかった。はじめから従来の日本墨を問題とせず、最高級品といわれた唐墨の域にせまろうとしたのだから無理はなかった。どんなに工夫をしても満足できなかった。しまいには本場の支那へ渡つて研究しようかとさえ考えた。だが支那まで出かけたところで、製墨家がもつとも秘密にしている製法が、そうやすやすと伝授してもらえるかは大きな疑問であつた。

然らば如何したら可か。此の上は書物に拠る外には仕方がない。

こう考えた梅仙は製墨に関する、あらゆる文献を渉猟した。程君房の「墨苑」万千魯の「墨譜」王道貫の「墨書」ちよう説之の「墨経」はいうまでもない。太平御覧・淵鑑類函・格致鏡原の類まで、ことごとく目をとおり、一々それを実地に試験の上の記録にとり、ついに「墨苑日渉」四冊ができた程であつた。

しがし依然として満足できる墨はできなかった。とかくするうちに数年間が夢のようにすぎ、当時の金で一万円ばかりというから、今なら数千万円にのぼる資金をつぎこんだ。

さすがの梅仙も弱つた。資金はすっかり使いはたした。親類や友人にも見はなされた。世間は狂人と嘲けて相手にしない。もはや製墨の仕事もやめてしまふより他はないまでに迫いつめられた。それにしてもせっかくここまで苦勞をかさねて、途中で挫折するのはしのび難い。何とかこの危機を切りぬける方法はないか、数

日の間、文字どおり寢食を忘れて考えこんだ。そうした一夜、ふと梅仙の心に浮かんしたのは易経の中の、

書不尽言言不尽意

という言葉であつた。また莊子の中に、

桓公が書見をしていると、輪扁という男が米で、貴男は何を読んでいるのかと訊いた。桓公がこれは聖人の言であると答えると、その聖人はいま生きているのかと重ねて聞いた。桓公はも早亡くなった人だと答えると、輪扁は、それじゃ貴男の読んでいるのは、みんな昔の人の糟粕ばかりではないかと罵つた。

とある話なども思ひだした。同時に、

なる程ここだな、

と天啓のようなものを感じた。つまり人真似ばかりしているから良い墨ができないのだ。自分で工夫して自然の中から本物をひき出すのだと悟つた。

こう気がつくといふまで塞がっていた道が、にわかにひらけたようである。梅仙も余程うれしかったのであろう。たちまち筆をとつて、

誰知糟魄本無真 手擲配万書思入

靈草秘泉随处在 彼何人我何人

の一詩をなしている。

再び血のにじむような苦難の日がつづいた。およそ墨の生命は油煙と膠できまる。梅仙が最も苦心したのもこの二つであつた。あらゆる油から油煙をとつてみた。下等な墨の油煙は菜種油からとる。ついで胡麻油、かやの油、椿油、あけび油の順となり、あけび油からは見事な油煙ができた。また同じ椿油でも大島産のものは赤味があつて墨客がきらつた。大島産ばかりでなく火山系の山の椿油は、殆んどその傾向のあることも分かつた。

油煙を採取する灯心にも、絹糸を灯心にまきつけたり、独特の工法をした。十本、五本、三本と灯心の数が少ない程、良質の油煙がとれた。また灯心――と油煙受けの皿は間隔がとおい程よく、近いと油煙の量は多くとれるが炎に焼かれて赤い油煙になった。

油煙を採集する設備も上・中・下の三段を部屋の三方に設け、殆んど密閉にちかい室内で、羽ばけを左手にして、ぐるぐまわつて受け皿に集めてゆく、まったく根気のいる細かい作業であつた。しかも仕事はこれだ

けではなかった。

油煙にまぜる膠がいった。しかも膠こそ墨の生命を左右する。数百年の後にも墨色のおちぬ、強い良質の膠を得るために、ある時は牛皮を酒や味りんで煮つめたり、鹿皮や背髓を試みたりもした。

製墨は夏は膠が腐敗変質するため準備だけにとどめ、冬の間にこなった。採取した油煙は厚さ五寸程の松板の上で、膠とまぜるのだが、今度は膠が寒さで固まった。そこで板の下に炭火をいれ、ほのかな温か味が板に伝わるようにした。いまから見ると全く子供のままごとのようだが、その頃はこの外に方法はなかったのだ。

こうした苦闘が何年つづいたか梅仙自身は語っていない。しかし明治十九年九月にいたり、梅仙は「墨苑清賞」と題する小著を刊行している。この少し以前に、ようやく自信ある良墨を完成したと考えられる。

「墨苑清賞」は「墨苑嚙語」とも云い、現代のB六判ぐらいの大きさで、和装四十頁たらずの小冊である。巻頭に敬雨・中村正直はじめ、一方居士・太湖王てつ臣・南摩綱紀等の序文をかかげ、巻末に南岳・藤沢恒・信天翁・栗本鋤雲の跋文がある。その記すところは中国における墨の歴史と、墨の良否・墨に関する逸話に及んでいるが、全文梅仙得意の漢文で綴られている。また、その奥書は明治十九年九月三日に届出て、同年十月二十七日の出版となり、著者は、大阪府平民鈴木梅仙・東区谷町五丁目十五番地とある。

これで見るとこの以前、梅仙は田辺市上屋敷の製墨工場を閉鎖して、大阪に移ったことがわかるのだが、大阪進出の年代は明かでない。ただ考えられることは梅仙の嗣子、静雨・鈴木謙次郎が、明治五年四月、田辺で生まれ、田辺の小学校に入学した後、石田酔古の門に入っているから、梅仙の大阪へ出たのは明治十四、五年ではなかったかと思われることである。

明治十九年、梅仙はおのれの理想にちかい墨をつくりあげ、十月「墨苑清賞」の一書を世にとうと共に、その年の秋おそく長く念願していた東京に進出し、同時にそれまで田辺に別居していた家族をよんだ。

梅仙の東京での最初の住居は、神田区表神保町四番地であつたらしいことは、「墨苑清賞」につづく第二著とみられる、「仿古園法概言」の巻末に飯店として、右の住居が記されていることによって知られる。

「仿古園墨法概言」の発行年月、その体裁は原本を見ない私には語る資格がない。手許にある写本から判断して、梅仙の上京後いくばくもない明治二十年か二十一年ではないかと思う。本書もまた殆んど漢文をもって記され、主として中国古文献中の墨に関する記事の紹介に終始し、併せて梅仙墨製造の秘伝の一部を述べたもので、東京進出にあたり文人墨客におくつた、一種の梅仙墨宣伝の文書とみられぬことはない。

……予、明治十四年の冬、親しく諸大家先生用墨の委嘱を受け、各サンランたる真筆の墨銘を賜い、

終に宮内省御用墨の恩命を辱くするに至る。愚賤の梅仙この寵榮を蒙り、且つ今回二、三先生の勸奨により、府下に仮寓を設け諸先生の用墨とを発旧す。伏して翼くは四方雲顧の君子、この拙墨を試み猶法に違ふことあらば、懷を開て教を賜らんことを。昼夜孜々敢て今日を以て足れりとせず、誓つて他年其妙処を究めんことを期す。

「彷彿古園墨法概言」の最後の文章である。これで本書刊行の目的や、梅仙の製墨上の抱負の一端がうかがわれる。その後梅仙は東京に住んでしばし居を変えたことは、明治三十三年の講演筆録『墨のはなし』の写本の最終頁に東京市本郷区元町一ノ二四とあることや、梅仙：歿後二男鈴木三郎が彷彿古園を経営したときの広告に、日本橋区浜町二丁目とあることによつて知られるが、どこにどれだけ住んだかは今となつては知り難い。明治三十年七月、梅仙は第三著「梅仙墨談」を刊行して、先輩知己に配布した。「梅仙墨談」も私は写本を見ただけで、原本を知らぬ。したがつてその体裁を語ることはできぬが、恐らく「墨苑清賞」や「彷彿古園墨法概言」と同じものでなかつたかと想像している。梅仙は先ず冒頭にわが国の製墨の沿革を述べ、ついで唐墨の種類と質を語り、墨の良否、和墨との比較を論じ、梅仙墨の特長に説き及んでいる。前の二著が漢文で害かれたのにくらべ、これは和文でしかも問答体の形式をとつていたので読みやすい。

この頃になると梅仙墨の真価がようやく世間からも認められて来た。文人墨客の間にも愛用者がおおくなつた。明治三十三年には美術家や書家の有志が墨宝会と称する会をつくつて、梅仙の製墨事業を応援することになった。梅仙はこうした人々の好意に応えて、会員のために墨に関する講演会を開き、五月には当時の綜合雑誌「太陽」と、「美術協会報告書」に、その講演原稿を掲載した。

梅仙がこれ程精魂をかたむけた梅仙墨とはどんな墨か、また墨がよいとか悪いとか云うが、どう云うことであらうか。「墨のはなし」を見ながら触れてみよう。

全体この油煙でも墨でも、只黒い一方の物かと云うに決して然うではない。自然その中に五色の別があつて、白っぽく黒いとか、赤っぽく黒いとか、青味をおびて黒いとか云うように、必ず差等があるものである。

その中でこの青くして黒いと云うのがある。最高尚優美なもので、書でも画でも濃淡共に明瞭にして、しかも穏しく見える。

即ち東はの云われか翠色冷光、或は蒼潤と云うのがこれである。そこで彼の方干魯、程君房の墨が大いに声価を博した所以は何であるかと云うと、やはり主としてこの愛すべき翠色冷光を含んで、且つ千

歳不乾と云って、いつまでも潤うているような妙がある故である。

梅仙は「墨のはなし」の中でつづけて曰く。

愚老の墨が明治二十五年^{一八九二年、三年}、六年ごろ橋本雅邦翁が一度使ってみて、非常に喜んでその後この墨ばかり使っている。美術学校の生徒が師匠がよいと言う故争ってこれを使う。

東京に多くの画家がある。その中で寺崎広業君、鈴木華とん君、川合玉堂君等が先ず眼について、雅邦君の画の墨気が勝れて違う。これは腕力で違う故であらうと、中にも寺崎君が水を遠方から寄せ、又自分で念を入れて磨り、種々にしても墨気が出ぬ。一日、翁を尋ねてどうすれば斯様な墨気が出ますかと、翁は笑うて一こつの墨を出し、余は近年この墨を用います。使うてみなされと、見れば香壁（梅仙墨の銘：清水註）梅仙造るとある。帰って雲龍を描く。雲気の工合面白く、他墨ではできぬ妙味が出た。成程これまでは腕だとのみ思ひしは墨でありしか、始めてこれを知り翁の真卒に隠しもせず、直に示されたを感じした。

梅仙の自信思うべしである。こうなると文人墨客は云うまでもない。ひろく風雅を愛する人々からも注文が相ついだ。当時梅仙がつくつた有名人の用墨を記しておこう。

墨 銘		氏 名		墨 銘		氏 名	
梨堂清賞	三条 実美	暗 香	佐藤 梅園	海東第一煤	犬養 木堂		
耕運館書画	滝 和亨	書画禪	富岡 鉄斎	永 寿	中村 不折		
天賜清福	巖谷 一六	長流閣清賞	川合 玉堂	菜花雨清賞	堀越 夜雨		
万斛香	橋本 雅邦	玉章墨	川合 玉堂	月 ぱい	鈴木 幸そん		
慈 雲	寺崎 広業	孔固亭如龍	巖谷 小波	此 君	川瀬 順輔		
翠色冷光	長 三州	華露天香	高橋 泥舟	無 銘	毛利 公爵		
翠色冷光	姫島 竹外	半古清賞	梶田 半古	天地清賞	星野 天地		
玄 華	藤原 南岳	泰山書画墨	土方 泰山	月光墨	尾形 月光		
文举清賞	野村 文举	無心庵清賞	渡辺 千秋	無 銘	西園寺公望		
鉄 舟	山岡 鉄舟	かざしのはな	そん田丹陵	華 歌墨	舞山 岸荷		
碧 雲台	益田 孝	斯 華	小野 鷺堂	と 山墨	末吉 と山		
千里一鞭	巖谷 小波	不朽盛事	細川 十州				

これをみてわかるように、有名な文人や画家だけでなくおゝくの名士が梅仙墨の愛用者となっている。その上橋本稚邦は東京美術学校の画学生にも、この墨を推奨したのでよく売れた。しかし梅仙は相変らず貧乏であった。それは梅仙自身が普通の製墨家とちがい、よりよい墨をつくることにのみ専念した、いわば芸術家的な気質にもあるが、もう一つ製墨事業そのものゝもつ宿命でもあった。

と云うのは、墨が枯れて一番使用に適した時期は、製墨後十年から五十年ぐらいの時、市場へ出すにして最低一年は経過した後でなければならなかった。したがって製墨が多量になればなる程、資金が固定することになるのであった。

梅仙の苦しい生活をみかねたのと、その一途な製墨への情熱に感じたのであろう、ある時鈴木梅仙と山岡鉄舟の間に、次の様な約束がかわされた。

それは鉄舟が書を一万枚書いて梅仙に寄贈する。梅仙はそれを売って製墨の資金に充てる。その代償に梅仙は鉄舟の用墨を無償で提供すると云うのである。鉄舟はこの約束にしたがい七千枚まで揮毫して、明治二十一年、五十歳で長逝したため一万枚には達しなかった。南部町方面には今でも鉄舟の書がおゝいのはこんな訳で、梅仙が晩年東京から持って来たのであるという。

また、梅仙の喜寿の祝のときであった。梅仙の貧しさに同情した書家や画家が相談の上各自が一枚ずつ揮毫して梅仙に贈り、これを売って梅仙の負債を返済したともいう。梅仙と梅仙墨について、これも同じ日高郡出身の作家、沖野岩三郎の随筆集「宛名印記」の中に、次のような記事がある。

それから数年の後であった。私は紀州新宮の教会に居た。(明治四十年―大正六年、清水註)そこへ訪ねて来た一人の画家が基監教信者だったので、度々其の寓居を訪ねて行つて、世間話をして居るうちに、その画家は、もっていた墨を使い切つたので、東京へ注文しようと思つて居るのだと言つた。

私は別に気にも留めないで、その話を聞き流して別れたが、帰り途に湯川という医者を訪ねた。すると偶然にも湯川氏は云つた。

「紀州の田辺出身で今東京に住んでいる鈴木梅仙という製墨の大家がある。その親類の子供が今度小学校へ入学した祝に、墨を送つて来たが、尋常一年で、それを使わせるのは勿体ないからと云つて、元の御祝儀に其の子の母から呉れた。けれども僕は万年筆で事が足りるので、あなたの知人に、梅仙墨のほしい人がいるなら上げて下さい」

私は直ぐにたつた今会つて来た画家の話をする、と、湯川氏は「では、其の人が欲しいというなら上げ

ますから、お序でに話して下さい」と言だったので、私は帰りがけにまた画家の所へ行つてその由を告げると、画家は狂喜して「見ず知らずの私に、其の御親切は言語に尽せぬ。では、とに角これを差上げて下さい」と言いながら、全紙四枚の山水画と、絹地の短冊三枚と、半切二枚の花鳥とを私に渡した。

私は梅仙の墨がそんなに価値あるものとは知らなかったので驚きながら、またそれを抱えて湯川氏を訪問して、座敷一面に其の絵を並べてとかくの批評の後、梅仙の墨を受取つて、また画家の家へ行つて其の墨を渡すと、画伯先生今度は呆氣に取られて、茫然としている。

「どうしたんですか」と私が詰ると、画伯先生言いくそうな口調で、「私は少なくとも二十円以上のものだろうと考えましたが、これは二十五銭の墨ですよ」と言つた。しかし考えてみれば、小学校へ入学したからと云つて金二十円の墨を送つて来る筈はないのだが、画伯は梅仙墨と云えば二十円以上のもので、その二十円以上の梅仙墨を買いたいと思いつめていたので、そりや来たとばかりに、書きだめの画を、みんな私に托して湯川氏に捧げたのであらう。

そこで私はまた湯川氏の所へ舞いもどつて、其の話をすると湯川氏も苦笑して、「まあ、何とかしましょう」と言つて、それから月余の後に、欄間の四君子を其の画伯に描いて貰つて、金二十円を包んで差上げる事で、梅仙墨買い被りの補償をしたのであつた。

私の手もとにある梅仙の墨はもう長さ一寸足らずである。これは大正九年(一九二〇年)に鎌倉で星野天知を訪問した時、分けて貰つたものである。星野氏は、もう梅仙が亡くなつたなら、本当の墨は日本から絶えてしまふと云つて、数百挺を一度に買い占めておいたのである。

梅仙氏は墨の製法を研究する為に、先ず文献を支那文学にあさつた。探究探究実に精細を極めたものであつた。そして支那墨の膠が魚皮であるに對して、梅仙氏は牛皮の膠を使った。其の他総ての製法が単なる支那墨の模倣ではなく、同氏独特の製法だったのである。

島田墨仙氏、橋本雅邦氏の経験によると、どんな名墨でも其の墨を筆に浸して一線を引いてみると、薄墨一尺で水になるが、梅仙墨は四尺まで伸びる。だから道釈画家が仙人の長い髯などを描く時梅仙墨を用いなければ、思うように筆は伸びない、橋本雅邦氏が墨は梅仙と決めていたわけは其所である。

これは古墨である。これは唐墨であつて何百年前のものだと思つて、梅仙氏はいつも斯う言つた。

「墨の価値は古きが故に貴いのではない。墨の年令は人間と同様で作つて三年、四年は墨の赤ん坊、

十年たてば子供だけの用を足す。十五年、二十年でまだ量見が定らない。四十年頃からしつかりして来る。それから二十年間が最も使い頃で、六十年以後の物は、もう老けてしまつて駄目である」

それは梅仙氏が古墨、唐墨を年代別に研究してみた結論だったのである。

明治三十三年^{（一九〇〇年）}であつた。梅仙氏は縦五寸幅二寸の大きな墨を作つて展覧会に出品した。それを見た橋本雅邦氏は非常に感心して、「これは立派なものだ。わしもこんなものをほしい。一つ作つてくれまいか」と言つた。すると梅仙氏も非常によろこんで、「では私も一世一代の品を作つて先生に使つていただきましょう。私の墨が先生に使つていただけるなら、私は死しても余榮あると云うものです」と云つて感泣したのであつた。

で早速其の翌日梅仙氏は橋本雅邦氏を其の邸に訪ねた。喜び迎えた雅邦氏は、直ちに筆を執つて梅花美人の図を描いた。そして其図を浮彫にして大墨十二挺を造るように註文にした。

梅仙翁は一世一代の名作を世に遺すべく心を籠めて製造に取りかゝつた。材料を吟味し製法に注意し、五郎正宗が銘剣を鍛う時の心持で造り上げた十二挺の墨を一々箱に入れて橋本邸へ持参した。

「おう、これは立派だ」雅邦氏はその一挺を手にとって、嘆息しながら、つくぐ打眺めていたが、ふと思ひ出したように、

「これは一挺いくら差上げるんだい」

と問うた。すると梅仙氏は両手で頭を撫でながら、

「これを先生にお納めすることが出来たので、もう私は満足です。代価といつて頂戴致しません。たゞほんの実費だけで結構でございます」と云つた。

「それは気の毒じゃが、わしも富裕な身ではなし、そういう事にしてもらおう。で実費はいくらじゃ」

「はい本当の実費で一挺七十円だけ頂戴いたします」

「うん、一挺七十円」

雅邦氏は頭の中で一七が七、二七十四の八百四十円……と計算したに違いない。

如何に日本一の大家であつても、明治三十三年^{（一九〇〇年）}の頃に墨代八百円とは少し桁外れの話である。今日の相場にすれば四千元である。（昭和十三、四年頃をさす……清水）

しかし、さすがに雅邦氏である。梅仙氏が一生のうちに本当に魂を打込んだ作品を作つてみたいと思つていたその心持がわかつたので、「よろしい」と、言つて承知はしたものの、さて八百四十円を即座

に投げ出し得る筈はない。けれどもいろいろ算段して七百円だけ調達して、あとの二挺は門弟二人が引受けることにした。それが今年昭和十四年^(一九三九年)で丁良二十九年目であるから、梅仙氏の言う通り付き盛りの墨になっている。

少し長かったが梅仙と梅仙墨の面目をよく伝えているので引用してみた。

梅仙はまた書をよくし、若いころ石田醉古に学んだだけに漢詩に長じ、おゝくの作詩をのこしている。

奇 絶 峽

両山相對聳 人歩雲辺

奇石極天巧 上飛百丈泉

壮年時代の作である。

梅仙は中年ごろから右手の自由を失ったが、くっせず左手で揮毫し、その書は左書梅仙と云いなか／＼風格があり、ここにも並々でない意志の人、梅仙の人格がみられる。

梅仙には二男二女があつたが、長男謙次郎は医師となり、二男三郎が製墨事業をついだ。大正六年^(一九一七年)二月梅仙は梅翁と改名し、三郎は父の名を襲ぎ二代目梅仙を名乗った。梅仙は家業を三郎にゆずると南部町で開業医をしていた長男謙次郎のもとへ帰り、悠々自適の生活に入った。この年代についても梅仙自身書きのこしていないが、多分大正二、三年^(一九一三乃至一九一四年)ごろではないかと思われる。

大正七年梅仙はおのれの死期の近いのをさすると、自ら筆をとって法号、尚左堂梅翁居士と記した。尚左堂は晩年の左きゝに由来したものである。十二月十五日嗣子謙次郎はじめ多くの家族に見まもられながら、製墨一すじにさゝげた多難な生涯を終えた。八十三歳であつた。墓は内室の生地、印南町切目光明寺にある。

二世梅仙はその後、南部町で製墨をつづけたようで、さんざん努力をしたが製品は初代梅仙には遠く及ばなかつたという。話がひどく散文的になるが昭和三十二年^(一九五七年)二月十八日の「梅洋新聞」紙上に、堅田三千穂氏が木箱の底から梅仙墨の広告がでてきたと、定価表をのせている。無論、二世梅仙時代のものであるが、当時の梅仙墨の価格がわかつて面白いので転載してみる。なお参考までに云うと大正十五年^(一九二六年)は、玄米一升の値段が三十五銭である。墨の定価と比較すると興味がある。

またこれを見ると、当時製墨場は南部町にあり、東京市日本橋区浜町に販売所があつたことが知られる。南部町に果して製墨工場があつたかどうか、堅田三千穂氏は前掲、「梅洋新聞」の寄稿の中で疑問をもたれているが、例え広告文とはいえ、製墨場・紀州南部町と明記されているのだから、実在していたとすべきであろう。

事実、嗣子・鈴木謙次郎翁も工場は南部町片町、いまの外山秀松氏邸附近にあったと筆者に語られている。

大正^(一九二六年)十五年十月改正 梅仙墨定価表

梅仙墨本舗ほう古園 鈴木梅仙

東京市日本橋区浜町二丁目十四番地（新大橋停留所際）

製墨場 紀州南部

振替口座 東京三七八一三番

製墨一丁型は四匁と御承知下され度

神通精煙	大二丁型	三十円	香壁	大四型	九円
〃	中一〃	十五円	〃	中二〃	四円五十銭
〃	小半〃	八円	〃	小一〃	二円三十銭
神品	大二丁	二十五円	梅仙墨	大二半	一円八十銭
〃	中一〃	十三円	〃	中二〃	一円五十銭
〃	小半〃	七円	〃	小一半	一円二十銭
一品芝精煙	大一丁半	十八円	絵島の霞	一半	一円
〃	小七分	九円	藤代墨	大二〃	一円五十銭
極品精煙	大三丁	二十一円	〃	小一半	一円
〃	中一丁半	十一円	藤代蘭	一〃	六十銭
〃	小一丁	六円	紅花墨	大二〃	一円
神龍	大一丁半	六円	〃	小一〃	五十銭
〃	小一丁半	四円	観音墨金巻立像箱入		一円
牛舌	一丁	一円	花柱	大二〃	六十銭
慈雲	四丁	三円五十銭	〃	小一〃	三十銭
朱錠・硝墨・書画筆・各国銘硯・特別雅号入なども御好に応じ精製可仕候					

その後二世梅仙は昭和^(一九二七年)二年十一月四十代で亡くなり、その子昌雄も昭和^(一九三一年)六年八月夭折して梅仙墨の正統をつぐ者が絶え、一世の名墨梅仙墨も姿を消すにいたった。

昭和^(一九四五年)二十年二月二十八日の紀州新聞の記事によると、二世梅仙の歿後、梅仙の名を用いて製墨した商人もあ

らずにすんでしまいました。その後弓友達で日本画をやっていた人から梅仙墨の能書を聞かされて「良い墨なら、どれでも同じ程度に良いのだろ」と簡単に考えていた自分の迂闊さを教えられたが、「馬の尻ボを一筆で描ける」とか「雲煙のボカシや濃淡の工合がどう……だ」と言うような話は、ネチャ／＼の油絵具と先のち切れたような絵の具筆の自分の世界とは、あまりにかけ離れていて、只祖父梅仙の賞められたのが、自分のことのように嬉しかったのをおぼえているだけです。

その後も、大分後になってそろ／＼梅仙墨が残り少なくなってきた頃、折角の祖父の作品をせめて一本ずつでも良いから、出来れば全部の種類を集めて置きたいものだと思って、ボツ／＼集めかけて見たが、その当時まだ残っていた梅仙墨目録の全部が集まり切らないうちに、支那事変が始まり大東亜戦争、敗戦、そして追放で、いつのまにかみんななくなってしまいました。そしてそんな梅仙墨を使って描いたと言う富岡鉄斎の寿老人図も、これだけは残して置きたいと思いながらそれもいつの間にかなくなってしまうって、現在の私に梅仙墨の想い出として強く刻み込まれているのは、梅仙墨そのものではなくて、一生の製墨に捧げ切って生きた祖父、梅仙のねばり強さと、その梅仙墨の想い出に結ばれた鉄斎の絵が老境に入ってから九十才に近づいて死ぬまでの二、三十年間、恐ろしくなる程の飛躍を続けて、人間のねばり強さが何処まで人間性を高めてゆけるかと言うこと——言い換えれば「技術を超えたところに芸術が生まれる」と言う簡単明瞭な東洋の言葉も、それを実現する為には人間一生を賭けなければならぬのだと言うことを、はつきり教えて貰ったことに対する感激であります。

梅仙墨は縁りの地である南部にも田辺にも、もう極く少し位しか残っていないでしょう。やがてそれ等もすっかり消え去る時が来るだろうと思うのは少々淋しい気もしますが、梅仙が創案したと言う製墨の秘法のようなものは、大分以前、東京からはる／＼訪ねてくれた人に伝わっている筈です。若しその方法が価値あるものなら、いつまでも日本の墨の中に、梅仙の心は生きる。

それで良いのだろうと思っています、

梅仙の令孫で洋画家である鈴木重雄氏の文章もこれで終っている。筆者の梅仙伝もこれでペンを納める。筆をおくにあたって思うのは梅仙のねばり強さだ。怒らく梅仙と云う人物は最初の目的どおり漢文の志をかえなかったなら、第一流の漢学者になっていたに違いない。その他どの道に進んだにしても、必ずその世界では頭角をぬきんでずにはおかなかったに相違ない。それ程彼の精進ぶりは猛烈であつたのだ。

(完)

湯川玄洋

「紀州新聞」昭和37年5月11・12・13・14・17・20・21日掲載

自分はこうしているうちに毎日午前中に回診する院長を知るようになった。院長は大概黒のモーニングを着て医員と看護婦を一人ずつ従えていた。色の浅黒い鼻筋の通った立派な男で、言葉使いや、態度にも容貌の示すごく品格があった。

三沢氏が

「まだ旅行など出来ないでしょうか」

「潰瘍になると危険でしょうか」

「こうやって入院した方が、やっぱり得策だったのでしょうか」

などと聞いたたびに院長は

「えゝ、まあそうです」

ぐらいな簡単な返事をした。

夏目漱石の長編小説「行人」の二節である。漱石は明治四十一年八月、大阪朝日新聞社の依頼で明石・和歌山・堺・大阪の文芸講演会に臨んだ後、胃潰瘍を再発して大阪市東区今橋三丁目の湯川胃腸病院に入院した。小説「行人」は大正元年から二年にかけて、朝日新聞に連載されたが、小宮豊隆著「夏目漱石」によると

——病院の模様、病室からの眺め、患者の種類など、殆んど「行人」に書かれている通りである。——
というから、漱石は「行人」の執筆にあたり、大阪で治療を受けた院長の湯川玄洋博士の面影を思い浮かべながら、ペンを走らせたに相違ない。

湯川玄洋は「行人」の院長のように、いつも黒のモーニング姿で診察し、患者に対しては口数が少なく、それがまた患者に信頼感を与えた。玄洋は朝早くから午後三時ごろまで毎日百人前後の外來患者に接し、その間に入院患者を回診したうえ、往診にも出かけた。湯川胃腸病院とさえいえば、一時は所番地を云わなくても車夫は車を走らした。それ位この病院は大阪人の間に評判であった。大阪ばかりではない。関西一円、中には玄洋博士の名声を聞いて、四国、九州あたりからも入院するものが多かった。

玄洋ははじめ讓三郎といい、慶応元年八月十五日（一八六五）和歌山市北河岸町五丁目、紀州藩士・坂部魯叟と・ます、の二男に生まれた。玄洋の女婿で有名な物理学者・湯川秀樹博士は、その著「旅人」で

——坂部家は、相当な格式の武家であった。讓三郎の父は一徹な人であつたらしく、主人に諫言して容れられず、切腹を仰せつけられた。讓三郎は小さい時から兄嫁に育てられ、大変苦勞をした。和歌山県立師範学校を卒業して、日高郡比井崎小学校に奉職した。そのころ、村長をしていた湯川玄磧に見こまれて養子となつた。湯川家は代々医者だったので、讓三郎も家業をつぐことになり、名も玄洋と改めた。

比井崎村は、安珍・清姫の伝説で名高い道成寺からは遠くない、日高川の下流から、少し西北方によつた海辺の村である。湯川の家も比井崎灣に面して、ながめがよい。その代り、時々津浪におそわれた。玄磧は医者をしてながら、一生を村長として村の世話をやいた。私の養母となつた人の名がミチというのも、玄磧が村に新しい道路を開いた時に生れたからである。

玄洋はその後、当時の京都府立医専——今の京都府立医大を卒業して、四国の伊予で開業した。それから紀州に帰り比井崎村に近い御坊町に医院を開いた。仕事に熱心な上に、なか／＼勉強家でもあつたようだ。そのころ出版した「胃腸療養新書」という本が、大変よく売れたらしい。その印税で、ドイツ留学が実現したらしい。ドイツから帰ると、今度は大阪で開業した。湯川スミが生れる前に、今橋三丁目の胃腸病院かでき上つていた。「食い倒れ」の大阪に胃腸病院を開いたことは、成功であつたと玄洋の畧歴を書いている。

玄洋——坂部讓三郎が和歌山県立師範学校、中等師範科を卒業したのは明治十六年七月であつたそして直ぐ様日高郡比井崎小学校に赴任したものと思われるが、この学校が先年の火災で全焼したいまとなつては、詳しいことは知り難い。ながく御坊小学校長であつた故菌和四郎氏は、玄洋と師範学校時代は同窓であつたと聞いている。

氣むずかしい漱石が「行人」の中で、

——色の浅黒い鼻筋の通つた立派な男で、言葉使いや、態度にも容貌の示す如く品格があつた。——とほめてゐる位である。私の手もとにある玄洋の写真をみても、やせ形の端正な見るから聡明そうな風貌である。

姿、容（かたも）だけではない。實際玄洋は頭脳明せきであつたらしい。村の有力者で医師の湯川玄磧が娘の養子にと見込だのも無理はない。明治十八年湯川家の養子となつて京都府立医専に入学した。讓三郎を玄洋と改名したのは戸籍面では明治二十三年一月十八日である。たぶんこの年彼は医学校を卒業して養家の医業を継ぎ、玄磧の長女のぶえと結婚したものと思われる。

医者になった玄洋は、はじめ四国に移って伊予で開業したが、間もなく日高に帰り御坊の町で医院を開いた。いま三和銀行御坊支店の附近であったという。そのころ御坊には田中秀徳と云う医師がいた。伝染病院の院長も兼ねていたというから一般に院長とよばれ、町民に親まれていた。新参の玄洋の医院は田中院長におされて、あまり流行らなかつたらしい。

しかし玄洋はその間を利用して書いたのが、日本でもはじめてといわれる胃腸病専門の通俗医書「胃腸病療養新書」で、この本は東京で出版した。幸いなことに「胃腸病療養新書」は素晴らしく売れた。玄洋はこの印税を手に入ると、新しい医学を学ぶべく早速ドイツ留学の旅にのぼった。

「胃腸病療養新書」はその後も版を重ね、昭和七、八年頃にも確かに実業之日本社から発売されていたと記憶する。今の新書判を少し大きくした様な体裁でクロス表紙であった。私は妙な因縁で当時この本をもっていたがながく本箱の隅に転しておいたため、すっかり虫に食われて表紙などボロボロになっていた。あまり必要のない上汚いので先年売り払ってしまった。惜しいことをしたと思っている。

これも湯川玄洋と因縁のふかい日高町の出身で、大阪毎日新聞の副主事などを経て現代浪速短大で教鞭を執るかたわら新聞学とマス・コミに関する研究を続けている、文学博士井上吉次郎は、昭和六年、当時和歌山市で発行されていた異色ある郷土文学誌「南紀芸術」の第二号と第三号に、湯川玄洋のことを書いた文章をのせている。

——日高出身で、大阪で開業して病院経営、大成功を遂げた湯川玄洋博士は、遇った感じは、すっきりしたものを見たすが□□くしさだ。ああいう人は頭脳明せきに違いないと思われる。茶をやり茶人伝などを書いている。

井上吉次郎博士はここで一度ペンをおさめた上、同誌第三号で再び玄洋を語っている。

——湯川玄洋さんの刀圭界の地位は知らない。「胃腸病療養新書」を出した時分、自分達は中学校を出たか出ない時で、自分達は著述家に対する憧れの最中だった。一度この偉い医学者に遇いたいもんだ、と思っていた。尤も私は小学校にいた折、折柄帰省中のドクトルに診て貰ったことがあった。胃が少し悪い。というようなことであつたが、私は黒い長い上衣を着たやせた背の高い姿を今に覚えている。そのつい一、二年前に湯川氏がドクトルになってドイツから帰朝し比井の港で煙火を上げて祝賀したもんだ。医者看板としてドクトル・メヂチーネというのが大変効果のあつた時代で、大阪なんかの有名開業医の新聞広告に、ずらりとこの肩書が列んでいた。

勿論洋行ということがとても大きな値打をもっていた。湯川氏の京都の医学校で同窓であった日高郡丹生村の西川英吉氏の話では、湯川氏は、御坊で開業していた時、「こんな所で、くすぶっていはつまらぬから、俺は、もう直ぐドクトルになる」といつていた。それからドクトルになった。ドクトルになって大阪で当てる時、「矢張り日本の学位でなくちや駄目だ、俺は医学博士になる」といつていた。それから医学博士になった。不思議に考える通り実現する男だそうだ。――

若き日の玄洋博士のサツ爽たる面目を見るようである。玄洋が学位を得たのは「高野山僧侶の食生活の研究」をテーマとしたもので、その後この論文をめぐって医学界に激しい論争があったとも聞いたことがある。再び井上博士の文章にもどる。

――私は著述家をこの上もなく偉いものと思っている頃に、小学校の時に一度診察して貰った同郷の湯川ドクトルが本を出したんだから耐らない。矢も楯もなく一度遇いたい、と考えた。

その後「胃腸の一年」という湯川博士の著書の広告の出たときには、もうそれほどでもなかった。その時は、私の書いたものが紀南新聞でなく東京日々新聞に載るようになっていたし

――中畧――

其玄洋博士に私は不図宇治で出遇った。赤壁会という蘇東波を偲ぶ会だったと思う。そこへ湯川さんが茗筵を設けて来会者を嚮なされたのであった。

その時始めて茶人としての湯川氏を知ったのであるが、その後段々に煎茶家としての湯川氏の地位を理解した。「日本茶人伝」を出されるに及んで、全くただの医者ではなかった、とつくづく感じた。

――後畧――

ところで御坊で開業中に著述した「胃腸病療養新書」の印税で、玄洋はドイツに留学したことはさきに述べたが、それが何年のことで、どこにどれ位の期間いたのかとなると私には資料がない。ただ前掲、井上吉次郎氏の文中に、氏が小学生時代に玄洋がドイツから帰朝したこと、明治三十五年^{一九〇二年}に大阪に進出している点など考えて、その帰朝は多分明治三十二、三年ごろではないかと思われる。また玄洋のドイツ留学中の動静についても、わずかに女婿・湯川秀樹博士の『旅人』に

――養父はドイツ留学中に、隣りの部屋のソプラノの練習に、大分なやまされたりしい――
とある以外、知る術はない。

ドイツ留学を終えた湯川玄洋は明治三十五年十月、大阪市東区今橋三丁目に湯川胃腸病院を開いた。商都大

阪の経済活動の心臓部、北浜のド真中である。何しろ大阪の食い倒れとまで言われる都会である。胃腸病患者が多かった。洋行帰り・医学博士の肩書がものを云った。その上患者に接する態度もうまかった。たちまち名医の評判がたち大成功をおさめた。

大正三年^{（一九一四年）}第一次世界大戦がはじまった。物資が不自由になった。玄洋は当時大阪での流行医三人と共同して、内北浜の緒方洪庵記念館の筋向かいに、そのころ民間にはなかったレントゲン光線や、ラジウムを使った理科病院を開いて、病院経営の手腕を発揮した。

——玄洋は医者として成功したが、目先のきく病院経営・謹厳・実直・果断など、実業界や政界に出ても一流の人物になり得る素質があつた。病院が関西証券界の中心にあつたことも、玄洋の経済観をたくましくした。日進月歩の医学をいち早く取り入れ、施療の合理化につとめた。——

昭和三年^{（一九二八年）}三月読売新聞和歌山版が紀州先賢の小伝を連載したとき、湯川玄洋を書いた同紙鍵山記者は、玄洋をこう記しているが蓋し名評と云うべきである。

臨床医家として病院経営に成功した玄洋は、中年以後というから、多分大正初年^{（一九一二年）}ごろからであろう。多忙な生活をさいて、書画・骨董・浄瑠璃・茶道に遊びはじめた。殊に書画では頼山陽と渡辺崋山を愛し、山陽の「水墨一葉竹」を好み、その模写に時のたつのも忘れることがあつた。

また自分でも南画風の絵もかいたが、硯の愛好家としても有名であつた。病院の方は長男・蜻洋博士がついでいた。いそがしいとはいえ幾らか時間的には余裕ができてきた玄洋は名硯であると聞くと費用を惜しまず買いつめ、その数は相当なものに達した。中でも双鷲・清涼・猫児研・如雪・虎伏・渡江・秋之田の七面の硯をこの上なく珍重し、自ら七石亭主人と号し、大正七年^{（一九二八年）}には我が国では洋本として初めてといわれる硯の図譜「精華硯譜」上下二巻・秩入・和装本を上梓した。

「精華硯譜」は縦三〇・八センチ、横二一・九センチの大形変形本で、はじめに京都の書家長尾雨山の序文と、玄洋博一の自序が何れも漢文で記され、つづいて玄洋博士のこれも漢文の例言があり、これまで出ている硯譜は、和漢ともに、その図柄がおそまつすぎて、好古風流の人々がうらみとしていた。そこでこの度私が硯譜を編むにあたっては、名硯をその所蔵家から借用した上、洋画家に依頼して一々現寸大の大きさに描かせ、色沢も実物どおりに着色して、石版或は銅版印刷にした。書名を「精華硯譜」と名づけたのは、古人の採硯記の中に「天地之精山靈之華」とあるのをとつた。

大体こんな意味を述べている。博士の本書は出版にあたつての抱負をみることができる。事実印刷製版技術

の進んだ現代から見ても見事なできばえで、殊に図版がすぐれている。

「精華硯譜」所収の名硯は、第一頁が京都、北野神社にある溜石硯・銘残月にはじまり、最後も同神社の端石硯・これに七石亭主人珍藏の八面を加え総数六十六面・種類も端石・おう石・澄泥硯・溜石硯・鞍馬石・銅硯・瓦硯・陶硯と多様をきわめ、産地も我が国はもとより中国、朝鮮、安南と各国にわたっている。また硯蓋・硯背に銘のあるものは、一々その・銘を薄葉に印刷するという凝り方である。趣味人でないと単なる出版屋ではできない周倒さである。

なお奥書によると「精華硯譜」は^(一九一八年)大正六年十二月二十五日印刷・大正七年一月三日・大阪市西区靱上通り二丁目十六番地博文堂合資会社から発売され、著作者は大阪市東区淡路町二丁目・湯川玄洋・正価拾貳円となっている。玄洋博士・五十三歳の春である。当時の物価から考えると、恐らく今の三、四千円に相当する豪華出版になるが、それだけの価値は十分ある。恐らく数多い博士の書著のうちでも、これはもつとも出色のものである。

玄洋博士が煎茶に心よせ茶人として一家をなすにいたったのは、いつのことか私は明らかにしない。さきに引用した井上吉次郎博士の小文や、その後の玄洋博士の著書「近世雅人伝」或は博士の歿後編まれた「七石翁遺愛品展観目録」の序文をみると、私は何となくその時期を「硯譜」を出した前後ではなからうかと想像するのである。

何事によらず、よいかげんではすまずことのできぬ博士の性格である。煎茶の世界に入ると忽ち売茶翁の高風に傾倒し、宇治黄びやくに売茶翁・顕彰のため高遊会が設立されると、大いに力をつくし有声軒で自ら茶筴をひらいた。また井上吉次郎博士が思いがけず茶人玄洋とめぐりあったのも、やはり宇治の赤壁会という蘇東波をしのぶ会で、玄洋博士が来会者に茶を嚮された席上であつた。

とまれ玄洋博士は煎茶道に精進するにつれて、次第に文人・煎茶家の事蹟に興味をふかめ、持ち前の一途さで、そうした風流人士に関する文献をひろく渉獵して、^(一九三〇年)昭和五年六月「近世雅人伝」を出版した。

「近世雅人伝」は上・中・下三冊が一帙に入り、和装・洋装仕立でいえばA五判くらいの大きさである。表紙は極めて薄い茶色・袂は藍色で中央には近世雅人伝の文字が隸書で書かれ、茶人の著書にふさわしい高雅さをみせている。

上巻二百九十二頁・中巻二百六十四頁・下巻二百四十頁、昭和五年六月二十一日発行。発行所は東京市本郷区湯島一丁目一番地、芸草堂と、京都市中京区寺町通り一条南入、芸草堂および、大阪市東区北久太郎町四丁

目柳原書店の三店である。

玄洋がこの著述をしたのはその自序の語るところを総合すると、茶会の席に飾られる書画骨董を中心に話題を提供し、趣味者の考拠となり読書家にはその伴侶となり、さらに修養の一助ともしようとするにあった。そのためこの書では、宝暦（七十五）以後の書家や画家・学者・貴紳・文人・雅客・名僧・処士・野人の各階層にわたり、いやしくも煎茶家の尊重するほどの人物はことごとく対象にとりあげている。

玄洋はまた本書の凡例で、この著作にあたって用いた参考文献を列举しているが、数えあげると約七十冊にものぼる。

「近世雅人伝」全巻に伝えられた雅人は、宝暦十三年（一七六三）八十九歳で歿した売茶翁はじめ、昭和三年・八十九歳で長逝した姫島竹外にいたるすべて百十七人におよんでいる。ことに私達が興味をおぼえるのは紀州人の祇園南海や桑山玉洲・野呂介石・菊池海莊・倉田何庵の詳伝である。

画家玉洲桑山嗣燦、好事の清癖あつて書画を好み、その購求に巨額の金を費すので、家は饒かであるが家婦は資産の蕩尽を憂いで

御不要の品は御売払いなされて、その代で、亦御買いになつては如何でございますか。
と其整理を夫君に請うた。

ム、尤もな話だ。

玉洲は出入りの骨董屋に売払うから早速来るようにと伝えさせた。

蔵品が多い桑山家のことから、骨董屋の主人は番頭の二人も召連れて早速伺候した。

ヤア、御苦労々々々。土蔵に入つて選択しよう。

三人を伴つて土蔵に入った。ここには多数の書画が、秩序整然と陳列されてある。

まず扇面からうる品を撰ろう。

と言いつつ、一本を開いて、

これはよく出来た。この人の青緑山水は珍品だ、これは瀟洒だ。扇面米法山水は見るから涼しそうだ。箱の中から取出して見ては入れ幾度となく繰り返し、

うる品は一つもない。

大口開いて笑うのだった。三人呆然。

上巻に収められた桑山玉洲の巻頭を転載してみた。全編このようなわかり易い文章で、各人の逸話を中心に

その畧歴を叙述している。筆をとつても矢張り一家をなすに足る。全く「往く所として佳ならざるはなし」とは、玄洋博士の如き人物を云うのであらう。

そればかりではない、「近世雅人伝」の序文につづく凡例の記事によると、博士はかねてから「七石翁茶話」と題する一連の双書物の刊行を計画していることが知られる。「近世雅人伝」はその第一編にあたり、第二編には「茶史煎茶道及茶具」上下二巻を予定していたが、遺憾ながらそれはついに予告のみに終った。周到な博士のことだから或程度、著述が進んでいたのではないかとも思われるが、その前後から博士の健康は急に衰えた。壮年時代の過労が禍いしたのかも知れぬ。晩年は心臓を病んだのである。

玄洋の最初の妻ノブエは明治三十四年^{一九〇一年}長男一男（のちの蜻洋博士）を生んで、間もなく早世した。玄洋はノブエの妹ミチと再婚した。玄洋と後妻ミチの間にできたのが二女澄子で、澄子の養子がノーベル賞受賞者の湯川秀樹博士である。秀樹博士の著『旅人』は秀樹博士が湯川家の養子となったのを、昭和七年^{一九三二年}四月としている。新婚後間もない一日、秀樹博士夫妻は和歌浦に静養中の玄洋を訪ねた。

養父玄洋は、娘の結婚の気づかれも加わって、一層弱った体を休めるために、式がすむとすぐに和歌浦へ転地した。二、三日たつて、私たち二人は養父を見舞いかたぐ和歌山へ出かけた。養父は昔からなじみの、新和歌浦の望海楼の、奥の部屋に泊っていた。窓の外は、直ぐに海で、蓬莱岩という名の岩が目につく。妻が自分で作って持参したフランス風のスープを出すと、養父は大喜びであった。

「旅人」に出てくる晩年の玄洋博士である。病院は長男蜻洋の代になっていた。玄洋は転地をしたり、大阪の内淡路町の自宅で静かに余生を養っていた。

内淡路町の家の中が異常に静かなように感じた。養父は少ししゃべると息苦しくなるようであった。一日じつと同じ所に座っている日が多かった。時々苦しうにせきこんだ。立って歩くことも大儀そうであった。壮年時代に余り働きすぎて、心臓が弱ってしまったのである。

これも「旅人」の中の一節である。ここに描かれている玄洋博士の横顔はいかにも弱々しく痛ましい。医師にはめずらしい広い才能も、生来の鋭い頭脳も遂に病気には勝てなかった。

昭和十年^{一九三五年}八月十五日午前八時三十分、おゝくの人々におしまれながら湯川玄洋は、六十九年の多彩な生涯を終えた。

思えば明治維新の動乱の最中と云うべき慶応元年^{一八六五年}に、紀藩の貧乏士族の伴に生まれた玄洋は、一度は小学校教員となったが、後、医界に転じ、大阪に出て今日の湯川胃腸病院の基礎をつくったのみならず晩年は悠々お

のれの趣味に遊び、専門の医書のほかに「精華硯譜」・「近世雅人伝」の好著をのこした。六十九年の生涯は今日から見ると必ずしも長いとは云えぬ。けれども我が国の文化史上にのこした業績は決して小さくない。

玄洋博士が晩年ちかくから集めた書画骨董は量・質ともかなりのものであった。ある時、井上吉次郎博士が内淡路町の湯川邸を訪ねたところ、長男の蜻洋博士が奥の金庫から大事そうに秘蔵の陶器を取出してくるところが、ユーモラスな筆致で南紀芸術にのせていたのを思い出す。

玄洋の蒐集品は博士の歿後、昭和十二年^(一九三七年)六月十三、四日の両日にわたり大阪美術クラブで下見の上、十五日入札競売された。総数三百七十一一点、文^文ち^文しょう^文の「連山一望松」が三万三千九百円で落札されたのを最高に総売立額は六十二万数千円にのぼった。今の金額にすると一億円にちかい。

入札下見にさきだって大阪美術クラブがつくった「七石翁遺愛品展観目録」が私の手許にある。世間にきこえた富豪・旧家なら別だが、いかに病院が盛大であったとは云え、ともかく一代でつくり上げた一胃腸病院長がよくこれだけ集めたと思う程、目録の内容は豊富で逸品揃いである。玄洋がどれだけ深く古美術を愛好したかが知られる。

——七石莊主人湯川玄洋博士は、夙に業余の閑を煎茶界に遊び、……晩年には文人煎茶家の事績を探ねて「近世雅人伝」の大著をなすなど、常に斯界の長老として、その趣味の普及に努める外、好んで山陽・竹田・木米・梅逸等の手沢品^{しゆたく}を蒐集し行往座臥愛玩措かざるのみか、一器一具を得る毎にその品の余何を問わずこれが製作伝来その他を研究し、一々その記を綴って、その器具のために備えるを楽しむとされたり、遺稿「七石文集」は、この記文を収めたるものにて、一度これを繙けば、何人も容易に博士の文人書画幅、煎茶具等に対する熱愛の度を知得すべし。……嗚呼溥土の如きはその煎茶家というべく、その座右に集められたる器具の幸福また察するに余あり。然りと雖博士今やなく、その寵愛を蒙りし器具も、また将に江湖に散逸せんとす。器具もし心あらばこれを歎かも、憶うに博士の靈必ずやこれ等多くの遺愛品のために、自らに代る良主を求め、且つ泉下より永遠にこれを護らるゝならむか。――

以上は「七石翁遺愛品展観目録」の序文から抜いた。玄洋博士の人となりと古美術品に対する心がまえの一斑が、よく窺える。

—— 完 ——

津村為徳

昭和37年7月12・13・15日「紀州新聞」掲載

今年の春もまだ寒い時分であつた。元御坊公民館町、故末弘時義氏の夫人が、アメリカから帰国されたときいて、二、三の者とお訪ねした時のことである。話がいろいろはずんだあげく、夫人は故津村為徳氏のことを話し出された。

津村氏は美浜町入山の人である。早稲田大学を出た後、明治三十九年（一九〇三年）、七年ごろ瓢然と渡米したまゝ、音信もとだえ勝であつた。もし津村氏の消息が分つたら知らしてほしいと、その親類筋から頼まれた。

夫人はアメリカに着くと在留邦人の誰彼に津村氏のことを聞いたが、その所在さえ不明のまゝ過ぎた。

ある日邦字新聞に俳人、津村木洋の死が報じられた。さがしていた津村為徳氏であつた。後できくと津村氏は木洋と号し、はやくから不定型俳句に沈潜し、在留句人の間で重きをなしていた。氏の消息がわからなかったのは氏が渡米後ずっと独身生活をつづけ、白人の家庭働き（デイウオーク）をして、社会の表面には一切出なかつたせいである。

末弘夫人のお話は、ざつとこんなものであつた。すると山中不艸氏が

津村木洋なら、たしか遺稿集が出ている。

御坊図書館にも津村慎吾氏寄贈の一冊がある筈だ。

と補足した。

私は急にその遺稿集がほしくなつた。木洋の手柄が私の心をひいた上、日高人の著書としても是非手に入れたかつたから。早速津村慎吾氏に手紙を書いた。数日後、津村氏がわざわざ遺稿集『わが一つの灯』をとどけてくれた。しかし此の遺稿集はも早一冊しかない。叔父の形見であるから貸してはやるが、やる訳にはゆかぬというのである。もつともな話である。

けれども「やれぬ」といわれると、私の妄執は一層強くなつた。悪い癖である。そこで此の近くの寄贈先をきいたところ、何れも図書館や故人の身内ばかりで、無理を頼めそうな所はなかつたが、ただ一人そうした関係以外、素花、亀石豊太郎氏のあることがわかつた。

幸い亀石氏とは辱知の間柄である。私はあらゆる巧言を連ねた手紙を送り、木洋り遺稿集をゆずってほしいと訴えた。ある日亀石氏がみえて

せらかくだが、あれは津村氏から贈られたものだ、君にやったとあつては氏の好意に反く、だが君の志もあんまり不憫だから、九十九カ年間貸してやる。

と本をおいて帰った。昔、日本は遼東半島を九十九カ年間、支那から租借していた。九十九カ年目には又、九十九カ年間期限を延長する。つまり永久租借であると小学校で習った。

無論、遼東半島と一冊の本は同日の談ではない。今から九十九年目には恐らく亀石氏も私も、土の中で眠っているに違いないが、その時は私も永い眠から目をさまし、約束通り亀石氏のもとへ、本を返しにゆくつもりである。

話がとんだ道草を食った。さて木洋の遺稿集『わが一つの灯』は縦二十一糎、横九糎、和装本、八十八頁である。表紙は各冊ごとに装いを異にするが、何れも遺稿を盛るにふさわしい高雅さを具えている。見返しに木洋が生前、師事した萩原井泉水が肉筆で、

月の野中にまたゝきもせぬ一つの灯は

の追悼句をよせ、木洋晩年の肖像がある。眉の太い端正な容貌は、壮年時代の永井荷風を思わせるが、心なしかその明眸には一抹の孤愁の影がある。

次に昭和二十七年（一九五二年）その一周忌に、桑港（サンフランシスコ市）市外コルマ日本人共同墓地に建てられた、

わが一つの灯へこほろぎよ鳴いて鳴いて

と刻んだ墓碑の写真を入れている。遺稿集の書名が木洋のこの句からとったものであることは云うまでもない。昭和二十八年十月一日京都市東九条山王町三八、大宝印刷株式会社が印刷製本の上、米国加州オークラント・ポビー吟社から、百部だけ出版刊行されたものである。

内容は、木洋の畧歴、和歌山市の層雲同人山本氏の聞書、井泉水の序文があつて、木洋の俳句約千二百句のうち百六十六句をおさめ短歌十三首と、明治三十六年渡米して、死の前年昭和二十四年（一九四九年）にいたる、四十七年間の日誌の抄録がこれにつぎ、最後に彼の親友、塩沢徹四郎氏の故人に関する井泉水宛私信と井泉水の「編集メモ」をもって終っている。

正直のところ津村木洋伝をなすには、私の用意が猶不足している。もう少し調査すべき点や、逢ってお聞きしたい人がいるのだが、怠惰な私にはそれがいつ果たせるものやら、我ながら見当がつかぬ。とりあえず彼の遺稿集『わが一つの灯』や、二、三の人の談話を中心に、木洋七十二年の足跡を辿ってみる。

津村為徳、号、木洋は明治十二年八月九日、日高郡和田村二八五三番地、津村徳右衛門の次男に生まれた。

津村家は入山の『峠の津村さん』で（通る）とおる豪農で、田畑二十町歩ほどをもっていた。

為徳の兄徳太郎は明治十五、六年（一八八二・三）ごろ内原村高家、玉置清三郎氏の養子となったので、次男の為徳が津村家を嗣いだ。為徳は少年時代から学校は優等生で通した。和歌山中学校を出て東京の早稲田大学に入った。同級に昭和初年ごろ代議士になった小山谷藏などがいたという。卒業後は政治家を志したと見えたが、母の死によって心境が変わったと伝える。少年時代から文学好きで「木洋」と号した。明治三十六年（一九〇三）九月二十二日、木洋は横浜埠頭から信濃丸に乗り、瓢然渡米の途についてた。

木洋の渡米の原因として考えられるものが二つある。一つは失恋説、あるいは愛人の死亡説、もう一つは木洋の遊蕩による経済上の行詰りとする説である。事実、木洋は渡米前かなり派手な遊びをつづけ、御坊市栄町、四海亭には木洋専用の浴槽まであったという。多感にしてお坊ちゃん育ちの木洋としてはありそうなことだが、それにしても渡米後その死にいたるまで独身でとおしたのはおかしい。何か深刻なショックがあったような気がする。

とにかく木洋はアメリカにつくと、之という定転につかず、白人の家庭働き（ディウオーク）をつづけた。一週のうち二、三日休くと、その週はらくに生活できたので、あくせくしなかった。そして俳句を作るのが何よりたのしみの方であった。一切の名聞も物慾もサラリと捨て去り、社会の表面には一切出なかった。まったく今様良寛とも芭蕉とも云うべき生活であった。

○夏草の匂いや踏みふる里の路のごとしや

昭和十二年（一九三七年）の句である。遠くアメリカの地まで来て、一切のきずなを切ったつもりの木洋にも忘れ難いのは、故里の山河であった。

○桃のはなラジオは東京の波長に合わせる

昭和十三年に作っている。春が来て桃の花が咲くにつけても、先ず浮ぶのは捨てたはずの故国であった。はるかにラジオの波長を合せ故国のたよりを貧るように聞かずにはいらなかった。同年

五月もの青し朝々グラスの水も

爽涼感が身うちにしむように感じるのは、私だけであろうか。また同年の句に

虫よ更けてもおなじところで鳴いている

というのがある。おなじ所で鳴いているのは虫だけであろうか。この年木洋は滞米四十年にちかい。やはり同じように白人家庭のディウオークをつづける己れを、同じ所で鳴いている虫とくらべずには、いらなかった

に違いない。

一つ一つ下手な評をつけては、却って木洋の句を汚すことになる。各年の句作のうちから二、三句ずつを並べてみる。

(一九三九年)
昭和十四年

○五月のあかるさわが作業着はよごれていて

○秋陽部屋一ぱいに入れ怠けているよ

○子を産んだあとの美しさ秋の灯に子を抱いている

昭和十五年

○ひとり大年の灯にもどりピーナツ嚙んでいる

昭和十六年

○夏雲や機械の国の野には機械が佇んでいる

○平和か戦争かとにかく葉落搔いている

昭和十九年

○戦局ながからん虫鳴いて夜々のバツック

○雷雨いたる高原のころの青葉ゆさぶり

○戦局しれずたゞに夜毎の銀河を仰ぐ

昭和二十年

○寒むざむ木瓜咲きぬ祖国は飢えてる

昭和二十二年

○元旦の心平凡なり平凡のよろしさを知り

○不男な樹だがクルミの樹それでも花を垂れてる

昭和二十三年

○春の水ふる里の河に似た河べり歩く

昭和二十五年

○わが眼にある故山の人みな若し落花紛々

○大地がもついのち莓一トつぶ一とつぶ赤さとなりて

昭和二十六年^(一九五一年)

○近づいて仰ぐと此の木も芽ぶいている何の木か

○夜霧に出て左様ならまたいつ会うことか

木洋の短歌は俳句にくらべて作品がすくない。そのうち二、三首をあげると、

昭和十年三月の作に^(一九三五年)

高野豆腐蒔の煮しめと黒豆の故郷おもう夜食したたむ

四月

ふる里の山河見ゆるもおおかたのことおぼろなるこのごろの夢

と故山を恋うている。また孤独なおのれを省みて

かりそめに棲みてわが老ゆこの町の公園の松もかほど伸びたる

等がある。

昭和二十五年^(一九五〇年)の春ごろから木洋は体の衰えを感じだした。十日ほど入院して、やゝ軽快になったとは云え、以来とかく健康がすぐれず、一人白人アパートの一室に起居をつづけた。昭和二十六年十月一日、オークランド市ウエプスタア街八八・シヤマンホテル五十番室で、木洋は一人、七十二才の生涯をとじた。

小竹岩楠

「紀州新聞」昭和37年9月15・17・18・19・20・21・22日掲載

南紀・白浜温泉と云えば、今ではわが国でも有数の温泉郷に数えられるが、つい四、五十年前までは隣接する湯崎温泉とはちがいがい、たゞのさみしい漁村にすぎなかった。ここに目をつけ初めて温泉を掘り旅館を建て道路をつくり、近代的な温泉地となる基礎を築いたのは、御坊の人、小竹岩楠である。

小竹岩楠は明治^{二八七四年}七年十月十八日、御坊市島無論まだ島村と云われていた時代である。島村の名門、塩路彦七の二男として生まれた。明治^{二八八八年}廿一年和歌山中学校に入学したが、廿五年三月病氣のため第四学年修了で退学した。

岩楠は少年時代から利かん気で頭もよく、小学校、中学校と、ずっと首席で通したというが、天は二物を与えず生来あまり健康ではなかった。廿六年御坊村の親戚、小竹佐衛門家の養子となった。

明治^{二八九四年}廿七年七月、東京一ツ橋の東京高等商業学校に入学したが、卅年七月再び病氣のため退学した。松本真一著「第一線に立てる人々」によると、

読書が物憂い何を読んでも頭に入らぬ、学友達はドシドシ氏の席次を超越して向上して行く。焦慮れば焦慮る程、病は重る。多くの青年学徒が学生生活中応々経験するように氏は人生の極度な悲観論者になって了った。最う自分は、完全に落伍者になった止むを得ないと一旦はすっかり観念しても、生来の強い功名に対する執着心は離れぬ、憂悶に憂悶を重ねた末、日頃世話になつてゐる教授連を順次に訪問して精神的苦悶を訴えて見た。併し何の教授も判で押したように頭から「元氣がない」と先ず叱つて形式的なそして一向にうるみのない「教訓」の言葉しか掛けてくれなかった。失望落胆して氏は遂に生きた屍のようになつて鎌倉へたどりついた。

と、この頃の小竹の悩みを伝えている。

その後岩楠は小竹家に帰り、蕪菜をつくつたり果樹を栽培して心身の静養につとめたので、約一年程でようやく健康をとりもどした。しかし青年客氣の悩みは容易に去らず、進める人もあつて明治^{二八九八年}三十一年九月、思い切つて鎌倉、円覚寺に釈宗演老師の門を叩いた。

当時宗演老師は参禅した乃木將軍を四ツ這いさせたと言ふ伝説をもつ程で、近代の傑僧といわれ朝野の名士で、その会下に参ずる者がおゝかった。岩楠青年はここで約二年の間きびしい師のけん鎚をうけ老師の大人格

に接しているうちに、大いに自得するところがあった。後年、往時を回想した小竹は、

老師の傍に居ると、何とも云えぬ愉快な、まるで羽化して登仙するような気持ちになったと

語った旨が、前記「第一線に立てる人々」にある。小竹の後年における異常な勇猛精進と不拔の意志は、無論その性格もあるうが、この時代の影響も少なくなかったに違いない。このころ彼は故あって小竹家を離れ塩路家に復籍した。

こうして岩楠青年は心身ともにすっかり回復したばかりでなく、新たに大きな人生への抱負を抱いて一先ず、その生家に帰った。明治三十三年夏のことであった。

当時の塩路家は老父彦七のもとに長兄友太郎、次弟徳松（後、淳之助）、三弟熊吉（後、中川勝平）があつて、家業の木材業を営んでいた。この年、岩楠は親戚一同のすゝめで、廃家にちかい状態であつた小竹家を嗣いだ。

小竹一族は代々御坊の名門としてきこえ、東小竹家（小竹佐右衛門）、西小竹家（小竹佐兵衛——所謂紀小竹屋）、南小竹家の三家があつたが、岩楠は南小竹家を嗣いだのである。三十四年一月、岩楠は西内原村小中の素封家大橋兵次郎の女、らく子と結婚した。

そのころ小竹が生まれた塩路家では、長兄友太郎が、酒色の巷に遊んで家業に身が入らず、放漫な営業振りがたゞって商売上の失敗がつゞき、日高でも指折りであつた財産も、破産の一步手前まで追いつめられていた。そうした折も折、明治四十年友太郎が病歿して三男徳松（後淳之助）が家督をついだ。

そこで小竹は徳松と三弟熊吉と協同して塩路家の整理にかゝった。彼等は第一番に三兄弟が連れ立って有力な親類を歴訪して幾らかの整理資金を借り入れ、一方では債権者に依頼して返済期限を延長して貰い、三人で山林木材の売買を営んだ。

三兄弟はよく協力し、努力もした、また商機を見る眼も鋭かったが、何よりも時期がよかつたし運もよかつた。それは県下の山林王として知られた有田の海瀬家と協同で買いこんだ日高川奥の山林から、予想以上におゝくの良材が得られたことである。そこへ日露戦争がはじまった。木材は急騰また急騰をつづけた。小竹は満身の商才を縦横にふるった。面白いほど儲かった。塩路家の莫大な負債はすっかり返済されたばかりでなく、昔日に倍する財産家となった。

材木商売と塩路家再建の成功は若い小竹に強い自信を与えた。時はあたかも日露戦勝利後のわが国の国力の膨張期であつた。小竹の事業界への野心が勃々として燃えあがつた。

ちようど其の頃、小竹の親類である田端春三、田端昌平、二弟淳之助の間に、製材所開設の話がもちあがり、

明治四十年^{（一九〇七年）}西川下流いまの昭和製材株式会社の附近に、資本金五万円、合名会社日高製材所を創立し、小竹はその業務執行委員となった。三十四才の時である。

今でこそ製材所はどんな田舎にもあるが何しろ五十数年も昔のことである。県下でも和歌山市と新宮にはあったが、田辺、古座にも製材所はなかった。第一ボイラーの据えつけから煙突一本立てるにも骨が折れた。職工も未経験者ばかりで勝手が分らなかったが、小竹はよく創業期の苦難を克服して社運は順調に発展したが、明治四十三年^{（一九一〇年）}四月急性肋膜炎のため約六カ月間静養することになり、製材所の業務は二弟淳之助が継いだ。いま日高地方産業界に重要な位置をしめる製材業の草わけは、若き小竹岩楠によって行なわれたのである。

明治四十三年十月、ようやく健康をとりもどした小竹は、病中構想をねった日高電灯株式会社（資本金三万円とも四万五千円ともいう）を設立して、その常務取締役になった。

明治四十五年^{（一九一二年）}、御坊町にはじめて電灯がついた。日高電灯株式会社は火力発電で、電力の供給区域もせまかったが、ともかく日高地方に、最初に電灯の光を輝かせた功績は大きい。越えて明治四十五年六月、日の出紡績株式会社が御坊に創立されるにあたり、小竹は大阪の大川英太郎、岩本栄之助、日高の津村英三郎、鈴木容等と共に創立委員として奔走し、実父塩路彦七を重役に推した。

小竹は日高電灯株式会社が小規模ながらも順調な歩みをつづけているのに力を得て、間もなく水力発電所をつくる計画をたてた。しかしこの計画には電力会社の大株主である日高地方の資産家が二の足をふんだ。資金の關係や経営の前途に対する不安が原因であった。

業を煮やした小竹は上京すると義兄の浜口吉衛門や、富士紡社長の和田豊治、木村平右衛門の応援をもとめ、一方和歌山中学時代の友人で我が国電力界の先覚、岸敬二郎博士の意見をきいて自信を得ると共に、極秘のうちに着々と企画をすゝめた。

大正四年^{（一九一五年）}六月かねて申請していた龍神村柳瀬の水力発電事業の認可がきたので、翌五年八月田辺電灯株式会社を買収して、同社と日高電灯株式会社、柳瀬水力計画を合併して新たに日高川水力電気株式会社（資本金七十五万円のち五百廿万円）をつくった。社長・木村平右衛門（海南）専務取締役・小竹岩楠、その他の重役陣には田端春三、瀬戸健三、菌喜太夫、田淵栄次郎、小川政次郎（以上日高）岡本庄太郎、多屋秀太郎、阪内虎次（以上田辺）上野山重太夫（浜口系）であった。

大正十四年^{（一九二五年）}一月木村平右衛門が社長を辞任して小竹岩楠が社長となったが、六月になって又々病氣になった。考えてみると明治四十三年^{（一九一〇年）}十月、資本金五万円たらずで発足した日高電灯株式会社は、大正五年、田辺電灯

株式会社を合併して資本金も七十五万円となったが、更に大正十年に資本金五百廿万円、地方としては押しも押されぬ大会社に発展した。無論この間の小竹の苦心は並々ではなかった。

松本真一著「第一線にたてる人々」は、

此の大増資断行の際は、恰度大戦後（第一次世界戦争）の財界反動で人気消沈の極にあり、加ふるに故原首相の凶変があつて、益々財界は悪化していた。世人は氏の無謀を笑い「小竹氏如何に八面六臂の力あらうとも、其成立は不可能」と話し合つたが、氏一流の鬼謀術策は美事に成功して、優柔不断な紀南民を愈々驚嘆させた。

当時氏の苦心の並々ならなかつた事は申すまでもない。氏は和歌山市在住の富豪を納得させる前に、先ず市の株式仲買人二十余名を密かに招待して、何の隠す処もなく何の策を用ふるなく赤裸々に事業状態を打ち明けて、ひたすら其の応援を求めた。其の仲買人の中には平生から氏の力量手腕に敬服している有力な三氏が居た事は、氏にとつて何より都合がよかつた。此の三氏が中心となつて他の同業者を口説いた。次いで地方の仲買人も之に策応して一斉に新株募集にかゝつた。為に意外に人氣が沸騰して遂に応募株にプレミアムすらもつくようになったのである……。

と小竹の苦闘を伝えている。小竹の発病はやはりこうした無理が禍いしたのかも知れぬ。

そのころ日高水力電気株式会社は、京阪電気鉄道株式会社に買収合併の話がもちあがつていた。会社が大きくなり事業が拡張されるに従い、資金のやりくりも大変であつた。消極的な地方の旦那衆である重役中には、この合併に賛成する者が多かつたが、小竹は終始、強硬な反対をつづけていた。長い月日を会社と共に歩んできた小竹としては無理のないことである。

そうした折柄の発病であつた。合併賛成派の重役達は此の機逸すべからずと、一気に合併へ押し進めたと云われるが、とに角大正十五年三月、日高川水力電気株式会社は遂に京阪電気鉄道株式会社に吸収合併され、後さらに合同電気、東邦電力を経て、今は関西電力株式会社の一部となっている。

×
×

これよりさき大正五年十二月、由良町黒山を中心とする豊富な石灰岩を主原料として、資本金百万円の旭セメント株式会社が創立された。社長・楠本武俊（日高町原谷）専務取締役・田淵栄次郎（御坊）の外、瀬戸佐太郎（藤井）上田金兵衛（御坊）笹野雄次郎等、重役陣には日高地方の大地主が参加した。大正六年末工場が竣工して盛大な開業式を挙げたが、いろんな事情から業績が振わず、大正十一年六月、大分セメント株式会社

に合併され、小竹は同社の監査役に就任した。

× ×

湯川宗城著「小竹岩楠翁小伝」の記すところによると、

翁は和歌山中学校在学の頃すでに白浜開発の志あり云々

とあるが、小竹の明敏をもってしても中学生時代、すでに白浜開発に着目したとするのは少し疑わしい。雑賀貞次郎氏著「白浜温泉史」に云う。

明治卅二年中瀬戸の芝田与七（そのころ新太郎という）が白良浜の烏岩のところにガスの出ているのを知り、宮地使用の許可を受け、田辺の医師榎本貞雄と共同出資で温泉試掘を行うたが、当時は今日のよう
に鋼錐による鑿岩や鉄管挿入などの技術を知らず、田辺の井戸掘業片山繁太郎とその手下三人が旧式の井戸を掘る方法にて掘鑿を試みたが何分海中のこととて潮の干満、波の動揺あり、作業進まず満潮時水深六尺のところにて十二尺を掘りて止めたるも、その十二尺のところにて一昼夜五百石程度湧出することを推定し得たという。

小竹は田辺の尾崎庄平（初代大阪商船田辺取扱店支配人）から以上の話をきき、紀勢鉄道の南下に備え、白浜開発を考慮したものゝ如く、大正七年九月二十一日田辺の旅館錦城館で小竹・尾崎・芝田三名会合して、小竹は芝田に烏岩温泉掘鑿の権利譲渡を求め、温泉郷開発の計画を語ったという。

つまり開発の動機はこの烏岩にあるようだ……

が真相にちかいかと思う。いずれにしても当時まだ海のものとも山のものともわからぬ烏岩温泉に着目した小竹の事業家的臭覚は、やはり偉としなければならぬ。

こうして小竹・芝田・尾崎による錦城館会談の結果、翌大正八年五月十一日、資本金五十万円の白浜土地建物株式会社が設立され、いよいよ白浜開発の壮挙がはじまった。なお参考までに同社の設立発起人の氏名を記しておく、

東京市〓木村平右衛門、楠本武俊、上野山重太夫、中村啓次郎（代議士）

大阪市方面〓大塚惟明（南海電車社長）池尾芳蔵、鹿子木彦三郎、維方正清、維方けい三郎、多屋昌三郎（田辺出身医師）雑賀繁次郎（瀬戸出身船舶業）

和歌山市方面〓西風重遠（代議士）、木本主一郎、玉置吉之丞（海南）川村正雄（海南）千田徹、原庄右衛門、橘由太郎、竹中源助、加藤たかし（和歌山市長）上山市郎兵衛、井爪孝一

紀南方面Ⅱ小竹岩楠、塩路淳之助、上田金兵衛、田淵栄次郎、藺喜太夫、田端春三、多屋秀太郎、那須孫次郎、尾崎庄平、芝田与七、榎本貞雄、岡本庄次郎、原秀次郎（大阪商船田辺取扱店実権者）近藤進十郎（田辺銀行）

と以上の顔ぶれとなり、同社の役員には次の人々が就任した。

取締役 木村平右衛門（代表取締役社長） 多屋昌三郎 那須孫次郎 小竹岩楠 芝田与七 設楽貞雄

射場正謙課（常務）

監査役 楠本武俊 緒方正清 大江幾太郎（四三銀行重役） 玉置吉之丞 上山市郎兵衛

× ×
ここでそのころ白浜の姿を雑賀貞次郎著「白浜温泉誌」がしのんでみると、

御幸通り一帯は耕地で浜に沿うては松原が広がっており、綱不知との間には山が隔てゝおり、山上通りなどは雑木材で新地なども谷奥の畠であった。大浦、小ヶ浦など一、二軒の農家があっただけであり、古賀浦の別荘地帯など人の行かぬ土地であった。

と全く隔世の感がふかい。前掲「白浜温泉誌」によると、

白浜温泉土地建物株式会社の常務取締役となった小竹は、温泉郷経営の第一番に今の御幸通りから綱不知山上通り、新地等の区域八万坪の開発を目標に、

① 白良浜の雪白硅砂をガラスの原料として村が極東ガラスに売っていたのを、補償金を出して採取を禁止した。

② 白浜一帯の松林を保安林とし景勝保全のため有償借用し

③ 土地約八万坪を買入れ

④ 白良浜海岸の温泉ガスの噴出ヶ所十八ヶ所を買収

⑤ 大正九年夏、三ヶ所の温泉試掘に着手

⑥ 大正十年四月本多静六博士を招き土地の区画整理を立案して貰い、竹越与三郎、杉本楚人冠を迎えて土地の雅号を選んで貰う等、着々適切な手を打ってゆき、大正十年四月には副社長に就任した。

× ×

大正十一年旅館白浜館が竣工した。十二月綱不知―白浜間の切通しから海岸通りまで五三七間（九七〇米）の道路改修にとりかゝり十二年四月に完成した。温泉の試掘も成功した。芸妓置屋の新築がはじまり白浜が急

速に温泉地化してゆくのをみた土地の人は、

あんな広い路はどうするのじゃ、アメリカ屋の木骨木ずり普請は、この風の強いところではもつまいと評判したという。

当時紀勢本線はまだ開通していない。少し海が荒れると欠航する汽船と、ようやく取入れられた自動車があるばかりの不便さであった。「明光バス三十年史」から大正十年代の県下の自動車交通界の状況を抜き出して見ると

許可年月日

被免許人

許可区間

許可営業種目

大正八、五、九

森本 修

御坊―藤白間(由良回り)

旅客運輸貸自動車

大正八、九

比井自動車

比井―御坊間

旅客運輸

大正八、七、三一

山上作太郎

田辺―朝来間

貨客運輸

大正八、八、一

山内 弥吉

田辺―南部

貨物運輸

十一、八

大正九、一、二六

熊野自動車

右

山内より譲受

大正九、四、二〇

日本自動車

御坊―内海間

森本修より譲受

大正一〇、六、九

日出自動車

御坊―南部間(名田經由)

旅客運輸及貸自動車

とある。以上の表でも分るように大正十年六月には、海草郡内海村(いまの海南市)から西牟婁郡朝来村までの旅客自動車の営業権が出揃った。業者間の話合せえつければ乗つぎなしに、海南から朝来まで自動車でゆけることになり、白浜開発を大きく前進させることができる。

小竹は当時日出自動車の監査役であったがこれに気づかぬ筈はない。果然大正十一年六月二十日、日出自動車は熊野自動車、比井自動車、田辺自動車組合(山上作太郎、九月十二日買収)を併合または買収し、内海、朝来間の旅客運輸が制一され一貫された。つづいて十一月二十四日和歌山市の南海自動車も買収して社名も紀勢自動車株式会社と改め資本金を三十三万円とし、小竹はその社長に就任して県下の自動車交通界に君臨した。大正十二年七月廿一日、白浜温泉土地建物株式会社と紀勢自動車株式会社が合併し、資本金八十三万円の白浜温泉自動車株式会社を設立し、本社を田辺町におき小竹はその社長になって県下の自動車交通を傘下におさめた。小竹の得意や思うべしであり、この時期が小竹としても最も幸福な時代ではなかったかと思う。

×

×

（一九二五年）

大正十四年六月大分セメント株式会社の重役会が大阪で招集された。この重役会は会社の経営に関し、かなり重要な問題をもっていたため、小竹は数日來の体の異和を気にしながら汽船で和歌浦につき、和歌山市富士屋旅館に至って、ひどい喀血をしたまゝ病臥の身となった。ところで小竹は前にも述べたように明治三十年七月、胸を病んで東京高等商業学校を退学し、四十三年四月には急性肋膜炎を患った前歴がある。その後、同旅館でひたすら安静につとめ、やゝ小康を得たので浜寺、六甲苦樂園で静養をつづけた結果、翌年秋になって、やっと健康をとり戻した。

この大患が小竹の心境に転機をもたらしたのであろう。また周囲のはからいがあつたのかも知れぬ。とにかく其の後昭和三年八月に至り、彼は白浜温泉自動車株式会社の社長を辞し取締役となり、社務を湯川登、玉置三七郎の両専務に委しているが、やはり大御所的な存在として其の枢機に参画した。

しかし昭和五年になると生來の事業家魂がまたしても頭をもち上げてきた。昭和三年白浜温泉自動車株式会社の和歌山自動車部を分離して白浜自動車商行としていたのを基として、合同電気株式会社和歌山支店バス部を合併、明光バス株式会社（資本金二十万円）を和歌山市におこし自ら社長に就任したのを手始めに、昭和六年六月白浜温泉自動車株式会社の全自動車を分離して明光バス株式会社に委譲の上、白浜温泉自動車株式会社は同七年十月三十一日、白浜温泉土地株式会社と改称して、専ら土地経営に当ることになった。

今日私どもは白浜温泉と云うと直ぐ明光バスを連想し、白浜の明光か明光の白浜かという感じさえ抱かせる。あの明光バスの成立はこう云うところから培かれてきたのである。その後、小竹の關係した会社は、昭和七年合同電気株式会社の監査役就任、同八年白浜水道株式会社（資本金十三万円）を設立、その相談役となり、昭和七年白浜温泉土地株式会社を設立、取締役就任等、年とともにその事業界での活躍は止るところを知らなかった。

しかし天寿は如何ともし難い。昭和八年九月廿七日、あれ程待ち望んだ省線白浜口駅の開通を目前としながら再び病床についた。

小竹の病篤しという報が一度伝わると、翁を知ると知らざるを問わず等しく其の平癒を祈ったが、十月五日早朝この紀南事業界の巨星は遂に長逝した。享年六十一、法名釈光超小竹の人柄については湯川宗城はその著「明光バス三十年史」で

翁は俊敏なるリアリストであつたが、半面昔の精神主義を堅持して渾然として矛盾するところがなかった。それは浄土真宗の信者として朝夕諷經したし、青年時代、鎌倉円覺寺で宗演老師の鉗鎚もうけたから

であろう。そこに主体性があり、翁がたゞの営利人でなく、人間的に深厚さをもつ人として信頼され、又敬慕された所以があると思われる。経綸の奥にはヒューマニズム・奉仕主義が貫通し、営利打算は、よくこの精神主義に統一されて破綻がなく、従って他人の正邪もよく洞見された。往年嗣子林二氏の慶応大学に学ぶや、筆者を介して大蔵事務官植野勲君の紹介により、近角常観先生の求道学舎に寄宿せしめたのも亦翁の心事の一端を示すものと考ええる。翁の壮年期の環境はそれ程道心的であつた。

と述べている。湯川はさらに其の著「小竹岩楠小伝」において

翁曾ていう。事業は自利即利他、利他即自利なるものにあらざれば真の事業にあらず

とも記している。湯川宗城は久しく小竹の下にあつた人であるが、これ等の記述は必ずしも過賞ではない様である。何れにしても利己一辺の事業家ではなかったことは彼の歿後今にいたるまで、氏を敬慕する人々によつて白浜卓堂会が毎年開催されていることによつても知られる。

小竹岩楠六十年の生涯は決して長いものとは云えない。しかし小竹が五拾年前に開発志した自浜の地は今や日本有数の温泉郷となつた。白浜温泉街の灯火が消えぬ限り白浜の温泉の涸れぬ限り小竹岩楠の名は永遠に記憶されるに違いない。

あとがき

日高郡に關係のある先賢人伝で、過去に誰も詳しく記していなかったものを、昭和三十七年に「紀州新聞」に連載したものとおう。

最近では和歌山県のホームページに「紀の国の先人たち」があったり、御坊市制施行五十周年記念御坊市教育委員会発行小冊子『御坊ゆかりの先人たち』や大新聞の地方版の特集に組まれるが余り詳しくはない。今回は四名の伝記で止まっているが、ここで筆をとめたのか、続けるつもりだったのが外の事で中止のやむなくにいったのか判らない。伝記として伝えるには詳しい方がいいとおもう。

当時の新聞社の活字に無い文字や明らかに誤りと思われる字句もあったが敢えてそのままにしています。

平成二十四(二〇一二)年三月二十四日(土)

清水 章 博